

わが行いにせずばかひなし

園長 児嶋 草次郎

梅の花が散り、今、河津桜がほぼ満開です。ジンチョウゲも甘い芳香を放ちながら元気いっぱい、プッチンプッチンといった感じで花をはじくように咲かせています。ジンチョウゲは、この強い香りを発するのにかなりのエネルギーを使うようで（おそらく我が身を削るような感じ）、10年もしないうちに次々に枯れてしまいます。ですから、それに備えて新たに挿し木して、増やしていかないと、途絶えてしまいます。その周辺に頭をもたげているフキノトウも、さっそくテンプラにして食べさせてもらい、春へ向けての英気を養うことができました。

さて、2月18日（土）から19日（日）にかけて、中・高生の子供たちと一緒に、鹿児島に一泊旅行に行ってきた。名付けて「郷中旅行」。3年に一度は行くようにしています。コロナで1回は中止にしていますので、4年ぶりということになります。

今回の旅行には、三つの目的がありました。一つは、知覧の「特攻平和会館」で戦争の恐ろしさ、理不尽さを学ぶこと。二つ目は、南洲墓地へ参り、西郷隆盛を育てた「郷中教育」について学ぶこと。そして三つめは、西郷の吉野村の開墾地跡地に立ち、石井記念友愛園の労作教育の原点を体で感じること。特にロシア・ウクライナ戦争を前にして、戦争がいかに道理に合わない戦いであるか、しかし矛盾するようだけど国を守ることの大切さ、を考えるにおいて、「特攻平和会館」が参考になるとも思いました。

2月18日（土）、ラッパ水仙や、河津桜の開き始めた庭を下って、資料館駐車場から朝7時20分バスに乗ってスタート。中・高生23名、職員13名、計46名の団体旅行。毎年、秋に実施するのですが、コロナ禍のため2月に延期しました。3年間の長いトンネルでしたが、感染も症状も落ち着いて来て、ようやく光が見えて来た状態です。しかし、マスクと手の消毒は徹底しました。

11時前、知覧町の特攻平和会館に到着。11時から語り部の方の講話があるということで、すぐに会場に移動し、話を聞きました。私は何度もここを訪れておりますが、友愛園の高校生くらいの少年のあどけない特攻服の姿の写真を見る度に、むなしさと怒りが胸の奥から湧きあがってきます。今の平和ボケした日常の中で生活する子供たちにとっては、衝撃的体験となります。特に、現在ロシア・ウクライナ戦争中であり、抽象的な“反戦”だけではなく、国を守ることの意味についても考える機会にしなければなりません。

この会館に行かれたことのない方のために、特攻平和会館のホームページから案内の一文を書き写しておきます。

「第二次世界大戦末期、沖縄戦において特攻という人類史上類のない作戦で爆装した飛行機もろとも敵艦に体当たり攻撃をした陸軍攻撃隊員の遺品や関係資料を展示しています。」

「敵の艦に体当たりするという命の尊さ・尊厳を無視した戦法は絶対とってはならない、また、このような悲劇を生み出す戦争も起こしてはならないという情念で、貴重な遺品や資料をご遺族の方々のご理解ご協力と、関係者の方々のご尽力によって展示しています。」

公園で弁当昼食を含めて、1時前頃までいましたが、後に提出した子供たちの感想文からいくつか拾ってみます。

「会場に入り話を聞きはじめて2分も経たないうちに、涙があふれそうになりました。悲しくても親に心配をかけたくないから弱音を吐かず、国の為に戦う姿に、とても心から尊敬しました。」

(ゆら 中3)

「ウクライナとロシアの戦争のこともすぐ頭に浮かびました。そして、大切な命を一瞬で奪う戦争は、二度とあってはいけなくて強く思いました。特攻隊のように自分の命をなげうってでも自分の国や家族を守ろうと必死に戦った人たちがいて、今の日本の平和があると思うので、感謝の気持ちを忘れず生活したいです。」 (まなか 中1)

「もしも僕が『明日敵の船を沈めて来い』と言われてたら、ずっと泣きながら遺書を書き続けていたでしょう。僕は、国、家族のために出撃していく彼らをほこりに思います。」 (たくと 中2)

「今は平和というものがあたり前のようにあるけど、一人ひとりが戦争は二度としない、させたくないという強い気持ちを持ち、それを受け継ぐ大切さや、平和のありがたさを改めて知ることができた。」 (ともな 高1)

「現在、ロシアがウクライナに侵攻するという世界的な出来事が起こっていますが、命の尊さを知っている日本だからこそできることはないのかと考える機会となりました。」 (なつこ 高1)

1941年、アメリカを相手に戦争を始めたのは日本ですが、戦局はすぐに不利な状況に追い込まれていき、戦況打開と米国の本土上陸に備えて捨身の戦法として考えられた「特攻」でした。国家存亡の危機に、若い兵士たちも立ち上がざるを得なかったのです。結局日本は敗戦し、戦後の復興と、その後の平和は、それらの若者たちの犠牲の上に成り立っていることを忘れてはなりません。

それから80年近い年月がたち、今、ロシアが一方的に隣国ウクライナを侵略し、戦争となっています。もう1年が経過し、戦況はウクライナ東部でこう着状態となっています。戦争は過去の話ではなく、戦況次第では、このアジアに飛び火する可能性は充分にあります。

私は、1週間後の「明倫塾」の時、重ねて考えてもらうため、新聞記事をみんなに配りました。「侵攻1年見えぬ出口」(朝日新聞2月24日付)という見出し記事と、「兵士の墓標また一つ」(読売新聞2月24日付)の2枚です。朝日の記事によると、ロシア軍の戦死者は4万～6万、ウクライナ軍の戦死者は、1万～1万3千人とのこと。また、ロシアからの民間施設への無差別攻撃や虐待で、ウクライナの民間人犠牲者は「2万人をはるかに超えた」とのこと。

そういう状況の中で、記事は戦死した2人の兵士を紹介していました。38歳の青年は、まだ結婚して4か月。マイホームも買ったばかりだったとか。「僕が行かなければ、誰が行くんさい?」と言って軍に入隊したそうです(朝日新聞)。もう一人の青年(31歳)は、フランスで自動車整備工として働いていた時ロシアの侵略が始まり、国へもどって、「国を守るため、逃げるわけにはいかない」と言って入隊。パートナーと誕生したばかりの娘が残されたそうです(読売新聞)。

ロシアの侵略に対して、何もしなかったら、ウクライナという国はまたなくなってしまう、そして家族がロシア兵たちに殺されてしまう。その戦う青年たちの純粋な気持ちは、80年前の我が国の特攻兵たちとそう変わらないのかもしれない。

話を一泊旅行に戻します。次の目的地は、南洲顕彰館です。ここでも最初に、学習室で「郷中教育」についての講話を聞きました。展示室をただ見て回るだけでは、どうしても上の空になってしまいますので、できるだけ肉声での説明をお願いしています。ありがたいことです。郷中教育については、中・高生の教科書である友愛園の「生活手帳」にも説明していますので、そのまま一部を書き写しま

す。

「西郷隆盛は郷中教育の中で自分をみがきました。郷中教育の中で、自分の身体と心の教育を受け、また自ら、後輩たちの指導をしたのです。郷中旅行から学ぶべきは、上級生たちのあるべき姿（責任）です。」

『郷中教育』の『郷中』とは、薩摩藩が武士の住居約 50 戸ずつを単位として作った組織で、西郷の家は、下級武士の住居地である『下加治屋町（約 70 戸）郷中』に属します。ちなみに、この下加治屋町からは、西郷以外にも大久保利通、大山巖、東郷平八郎など、多くの偉人を輩出しています。

この各『郷中』内での青少年同志の相互鍛錬教育が、郷中教育なのです。元服して結婚するまでの青年を『二才（にせ）』と呼んでいます。14 歳以下の少年は『稚児（ちご）』です。この『稚児』はさらに長稚児（おせちご 11 歳～14 歳）と小稚児（こちご 6 歳～10 歳）の 2 グループに分けられます。小稚児グループを長稚児グループが教え、長稚児グループを二才が教える。そのような組織で、300 年以上続いたようです。もちろん、これ以外に藩校もあり、西郷は、13 歳頃から藩校聖堂（造士館）に通学しています。」

その郷中教育の内容については、ここでは省略しますが、この教育方法を友愛園も取り入れて来ました。しかし、この 4、5 年は、崩壊状態にあると言ってもよいでしょう。日本の伝統的な集団による切磋琢磨が軽視されるようになり、子供たちの中にも個人主義が浸透し、高校生になっても、生活習慣や自律力が身についておらず、下級生たちから馬鹿にされるようなありさまで。定期的に現地を訪れることで、再生できたらと願っています。

子供たちの感想文から、その反応をいくつか拾ってみます。

「生命館での生活を振り返ってみると、上級生もあたり前のことができていなかったりして、注意されたりすることもありました。これは普段の行動などで模範が示せていないのだからと感じます。このように、今の三友館、生命館のままじゃ、意味がないと思います。もうすぐ一つ学年が上がり中 3 となるので、上級生と言われる存在になり始めます。」（ももか 中 2）

「郷中旅行では、年令の違う人たちが教えあったりして学ぶものだと教えてもらいました。僕は年が一番上の人がしっかりしていないと、周りでいじめが発生したりがおきるのではないかと思いました。南洲神社では、示現流（じげんりゅう）のけいこをやっている、今でもこういった事は受け継がれているのだと感じました。」（たくと 中 2）

「郷中教育について、学べば学ぶほど、友愛園に似ていると感じました。今と昔の環境は違っても、先輩が後輩に手本を見せ、率先垂範をする。それを見た後輩たちが先輩たちに憧れ、同じように育っていく。私自身行動を振り返ってみても、自分に甘く、後輩たちにも甘く、なれ合いの関係になっていたと思います。まず自分に厳しくし、後輩たちを指導していけるような先輩になりたいと思います。」

（なつこ 高 1）

「今の私たちは、自分たちに甘くなり、下級生にも模範となるような声掛けや行動ができていないように感じます。模範となる行動を示していきたいと思いました。」（れいな 高 3）

みんながみんなこのようなチャンスを自分のものにできるわけではないけど、このように自分の感性で受け止めてくれると、今後の成長が期待できます。

その後私たちは、墓地、神社をお参りし、城山展望台に移動して桜島や鹿児島市街を見下し、さらに昭国神社にもお参りして、ホテルに 4 時過ぎに入りました。

2 月 19 日（日）は、朝 8 時半頃ホテルを出て、まず向かった先は、「吉野町南洲翁開墾地遺跡」。最近私は、この地は、友愛園の「労作」の原点だととらえるようになり、旅行のコースに加えるよう

にしています。政争に愛想を尽かした西郷隆盛は、何もかも捨てて故郷鹿児島に帰省し、私学校を設立し、その分校として吉野開墾社を開きます（明治8年）。150名の青年たちと一緒に約40ヘクタールの大地を開墾し、夜は勉学に励んだと言われます。近代的な国家に生まれ変わらせるため、この頃国は殖産興業を推進しますが、農業もりっぱな産業で、日本各地、多くの開墾が行われました。

石井十次は15歳（明治13年）の時、警察に逮捕されて鹿児島の警察署に収監されます。西南戦争（明治10年）で西郷と一緒に戦った青年にその留置所で出会い、この開拓思想に共鳴し、出所後、高鍋や川南で友人たちと一緒に開墾事業に挑戦しますが失敗しています。

おそらく、鹿児島から宮崎に帰る途中、この吉野村に立ち寄ったに違いありません。しっかりこの大地を目に焼きつけ、茶臼原に理想郷を作ろうとした時の原風景（模範）となったはずです。海から10K程度というのも合致します。

この日は残念ながら雨で、私たちは傘をさして、広い駐車場のある所から歩いて現地に15分ほど登りました。150年近く時も流れ、あたりはすっかり森にもどり、雨にぬれながら、わたしたちは、大きな石碑の前で記念写真におさまりました。

「石井十次先生にも大きな影響を与えた西郷隆盛が若者たちと一緒に学び、汗を流して開墾した跡地に行きました。友愛園でも『労作』をしながら自立へ向けていろいろ学んでいるので、園長先生にも言われた『友愛園の労作の原点』の土地に実際に立つことができ良かったです。」（まなか 中1）

靴をビショビショにしながらバスにもどり、また鹿児島市内に帰ると、子供たちは午後2時頃まで街を散策したり天文館等で買物をしたりして過ごしました。私は一人になって、古本屋や本屋等を探索し続けました。そして駅前の大きな本屋で、2冊、参考になる本を見つけました。「大西郷の悟りの道『敬天愛人』とキリスト教」（坂本陽明著）と「郷中教育と薩摩土風の研究」（安藤保著）。

「大西郷」云々の著者は神父さんで、西郷が漢文の聖書を読んでいたと紹介されています。私にとっては新しい発見。石井十次の「天は父なり」云々と「敬天愛人」とが、より近い意味となります。安藤氏は、郷中教育は世に言われるほどうまくは機能しておらず、いじめ等の温床にもなったというような指摘をされています。私に言わせればあたり前のことで、何ごとも形骸化すれば逆効果です。大分県の私塾「咸宜園」でもそういう傾向が見られ、一人ひとりに役割当番を持たせることで、その悪癖を克服させました。

なれあいやいじめの問題は、集団生活の宿命です。師となる人、リーダーが、師弟同行しながら模範を示すことで、教育として成り立ちます。西郷隆盛の育った下加治屋町の郷中教育では、国のリーダーが同時期に何人も育ったわけですから、ある意味、奇跡的に機能したのでしょう。2月末の子供たちの「反省会」の時、このことを指摘し、友愛園のリーダーがしっかりすれば、この中から国や地方のリーダーが育つことは夢ではないと話しました。

一泊旅行が終ると、子供たちは、何ごともなかったかのように、日々、学校に通い生活を重ねています。今回の体験が、心の中に少しでも残っていれば、これから少しずつ変わっていくのでしょうか。期待したいと思います。

それにしても、気になるのは、ロシア・ウクライナ戦争です。できるだけ身近に感じるために、関係のテレビ番組を録画して見たりしていますが、胸に突きささっている言葉をここにあげさせていただきます。

「国家元首が引き起こした非人道的なゲームの中で、自分が“小さなねじ”として利用される感覚でした。」（国外に脱出したロシア軍元将校の言葉 NHK「調査報告・ロシア軍～プーチン軍隊で何が～」）

「私が今生きていられるのは、強烈な憎しみを抱えているから」(息子を殺された女性の言葉 NHK「マリウポリ“包囲日記” 私たちは諦めない」

『警棒を肛門に突っこんでズタズタに引き裂くぞ』とロシア兵に脅され、恐くて何も考えられなかった。」(ウクライナ聖教会の司祭の言葉 NHK「占領された街で～ヘルソン 命がけの記録～」

石井十次少年は、13歳で高鍋島田小学校を卒業すると、父の指示で義兄と一緒に九州旅行に行っています。まず見たのは、西南戦争1年後の熊本田原坂の惨状でした。家々は焼き払われ、人骨も散らばっていたのではないかと。相当ショックだったと思うのですが、それでも、軍人養成の東京「攻玉社」に進学。1年足らずで退学した理由は脚気という病気ということになっています。しかし私は、今では軍人になることに迷いが生じたのだろうととらえています。子供たちは、今まで以上に、それぞれ自律力と判断力を必要とする分岐点に立たされています。今回の経験を子供たちが活かしてくれればと願います。